ISSN 1346-7220

鹿児島大学総合研究博物館

THE KAGOSHIMA UNIVERSITY MUSEUM

newsletter

NO.9 JULY 2004

総合研究博物館　常設展示室

2004年5月21日に常設展示室が新規オープンいたしました。この展示室は昭和3(1928)年に鹿児島高等農林学校図書館書庫として造られた建物を改修して利用しています。

鹿児島大学総合研究博物館は2001年4月に国立大学7番目の総合博物館として設置されましたが、これまでは常設の展示施設がなく、学内の共有スペースを借りて、期間を限定して特別展や企画展を開催してきました。特別展など各種イベントは引き続き学内の共有スペースを利用することになりますが、今後はこの施設を中心に鹿児島大学に蓄積された学術標本資料の普及公開・教育活動を行っていきます。より多くの方のご来館をお待ちいたしております。

総合研究博物館 常設展示室　開設

学長挨拶

総合研究博物館常設展示室の開設を祝して

鹿児島大学長　永田行博

鹿児島大学は、その前身である旧制の高等学校や専門学校時代から、百有余年の歴史を重ねて来ました。以来、昭和24年の鹿児島大学の創設から55年目の今日まで、さまざまな分野の教育と研究が行われ、多くの学術資料が集められてきました。一方、本学の博物館は、平成13年4月、国立大学では7番目の、新制大学では最初の総合研究博物館として設置されました。現在、学内の各学部および研究室に所蔵されているさまざまな資料を、教育や研究に役立てるための活動が、博物館スタッフならびに兼務教員によって進められています。

ところで、博物館といいますと、必ず資料の展示施設を想定いたしますが、残念ながら本学の博物館は常設の展示施設を持たないまま3年が経過しました。昨年、学内にある建物の有効活用について見直しを致しましたところ、旧高等農林学校図書館であったこの建物を博物館施設として利用できないものだろうか、との再利用案が浮上しました。この建物は昭和3年の建築と申しますから、建築後76年を経過した、本学では最古の建物ということになり、博物館施設として利用するにはもってこいの建物というわけです。この古い建物の改装につきましては、全学のご理解をいただき、昨年末から改装に着手しましたが、この3月末、無事に改装を終えました。

本学で収集された貴重な学術資料を公開し、これまでの研究の成果をわかりやすくお伝えするため、改装なったこの建物を総合研究博物館の「常設展示室」として利用することになり、開設式典を迎えることが出来ました。

これもひとえに学内外の皆様のご理解とご支援によるものと感謝申し上げます。本日、この「常設展示室」の開設にいたりましたが、本博物館は、資料収蔵室や研究実験室等の確保が未解決のままであります。今後、これらの問題を解決し、名実ともに日本を代表する大学博物館を目指す所存であります。

本学の総合研究博物館が益々発展いたしますよう、これからも皆様方の一層のご支援をお願い申し上げます。

平成16年5月21日

総合研究博物館 常設展示室の開設にあたって

鹿児島大学では、前身の旧制高等学校や諸学校時代から今日まで、さまざまな分野の教育と研究が行われ、多くの学術資料が集められてきました。そして、本学の博物館は平成13年4月に設置され、現在、学内の各研究室に所蔵されているそれらの学術資料を収集・整理・保管し、教育や研究に役立てるための活動を進めています。

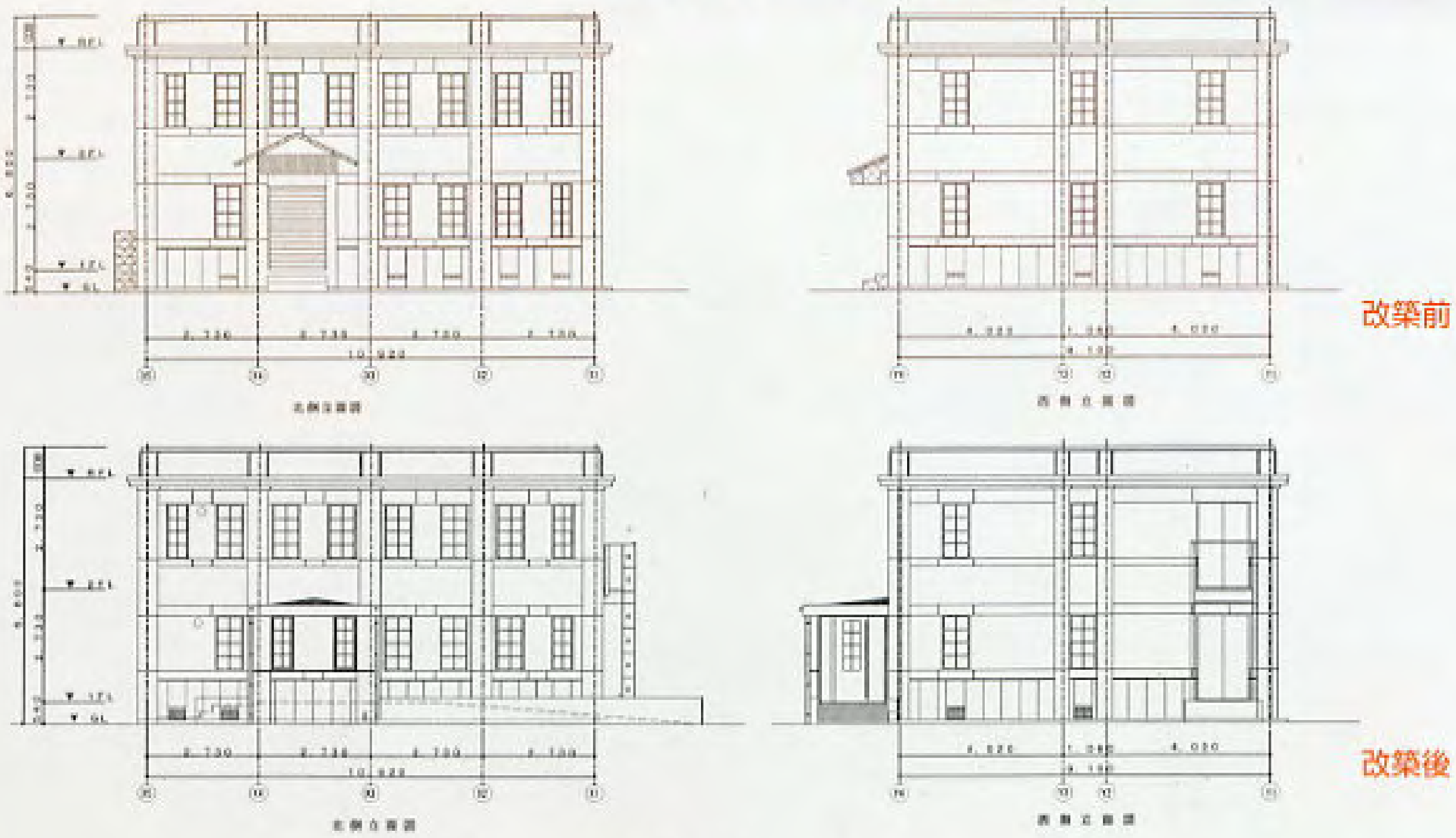
このたび、貴重な学術資料を公開し、大学におけるこれまでの研究成果をわかりやすくお伝えするため、常設展示室を開設いたしました。

昨年、この建物を、「博物館施設として利用したらどうだろうか」とのご提案が学長からありました。正直に申しまして、一瞬、その建物の見事さに、目の前が真っ暗になるやら、ひょっとすると見事に化けるかも知れないとの期待やらで、複雑な気持ちになりました。調べましたところ、この建物は鹿大に残る最古の建物であることから、十分な広さではありませんが、博物館施設とふさわしいと考え、ご提案をお受けし、改装をお願いいたしました。

ですから、展示物だけでなく、建物そのものも鹿児島大学の歴史を語る大切な資料です。改装にあたっては、できるだけ昭和3年建築当時の雰囲気を残しました。初回の展示内容は、キャンパスから出土した考古資料、鹿大および前身の学校で教育研究に使われていた古い実験機器、鹿児島が世界へ誇る金鉱石、さらに南九州の太古の海に棲んでいた生物の化石です。狭いスペースですが、多くのみなさまに、ご観覧いただけましたら光栄です。

ところで、本博物館は常設展示室を開設いたしましたが、いまだ特別展の会場、資料収蔵室や研究実験室の確保などの問題をかかえております。今後、これら諸問題を解決し、より充実した大学博物館の運営と活動を進めようと、スタッフ一同張り切っています。これからも一層のご支援をお願い申し上げます。

総合研究博物館長　大塚裕之



常設展示室

展示案内

展示のスペース

総計198m²

展示面積150m²（1F:60m²，2F:90m²）

展示テーマと内容

1）古代からのおくりもの一鹿大に眠る遺跡一

今、われわれが立っている鹿児島大学構内は、いくつもの時代を経て現在に至っています。郡元、桜ヶ丘の両キャンパスはともに、過去の人々がさまざまな活動をした「遺跡」です。両キャンパスではこれまでに継続的に発掘調査が行われ古くは旧石器・縄文・弥生時代から、新しくは江戸・明治時代までの考古学資料が出土しています。とくに郡元キャンパス内の遺跡は、古墳時代には南九州を代表する大規模な集落が営まれたことが判明しており、土器を中心とするたくさんの資料が出土しています。

常設展示室では、鹿児島大学構内遺跡を代表する考古資料を展示しています。1万年をさかのぼる縄文時代草創期の石器から近代の遺物まで展示しますが、とくに6世紀代にあたる古墳時代の成川式土器は良好な資料をたくさん展示しています。

2）機器でたどる鹿大の教育研究史

大学での教育・研究にはさまざまな道具を使います。とくに実験機器類は数多くの場面で利用されてきました。

ここでは、鹿児島大学の前身のひとつである第七高等学校（造士館）（1901～1950年）、鹿児島高等農林学校（1908～1944年）時代の顕微鏡や物理機器などの教育研究機器や学生のレポート等の資料を中心に紹介します。いずれも明治末から昭和期の教育・研究の歴史を知る上で貴重なものです。

3）地球のめぐみ

地球がもたらした鉱物資源にスポットをあてました。35億年前の太古の海で酸素を放出した地球最古の生物（藍藻類）が造った岩石（ストロマトライト）と、その酸素と鉄イオンが結びついてできた鉄鉱石（縞状鉄鉱石）の標本を触ってみませんか。現在の人類の文明をささえる鉄はこの時形成されたものです。地球の深部からきたマグマがもたらす熱水のまわりで、現在も生きている原始的な生物（シロウリガイ、サツマハオリムシ）の化石などを展示しています。

また、熱水は金などの多くの鉱物資源を生み出しました。鹿児島県は金が日本でもっとも多く採れる場所です。鹿児島の金鉱床から採掘した良質の金鉱石や日本全国から集められたたくさんの金鉱石の展示を行っています。鹿児島県が日本一の金の産出量を誇ることを、ぜひ実感して下さい。

4）鹿児島の海と生命の歴史

鹿児島県は南北およそ600km，九州南部から与論島へいたる多くの島々からなります。この細長い鹿児島県とその周辺には、陸に恐竜類・海にアンモナイト類が生きていた約1億年前の中生代の中期から、人類の時代である第四紀にかけて海に堆積した地層が分布しています。これらの地層から見つかったアンモナイト、二枚貝、巻貝、サメの歯、魚の化石、カニの化石などを展示しました。太古の海をすみかとした多様な生き物に思いをはせてはいかがでしょうか。

常設展示室前史－建物の歴史と特徴－図書館書庫

図書館書庫

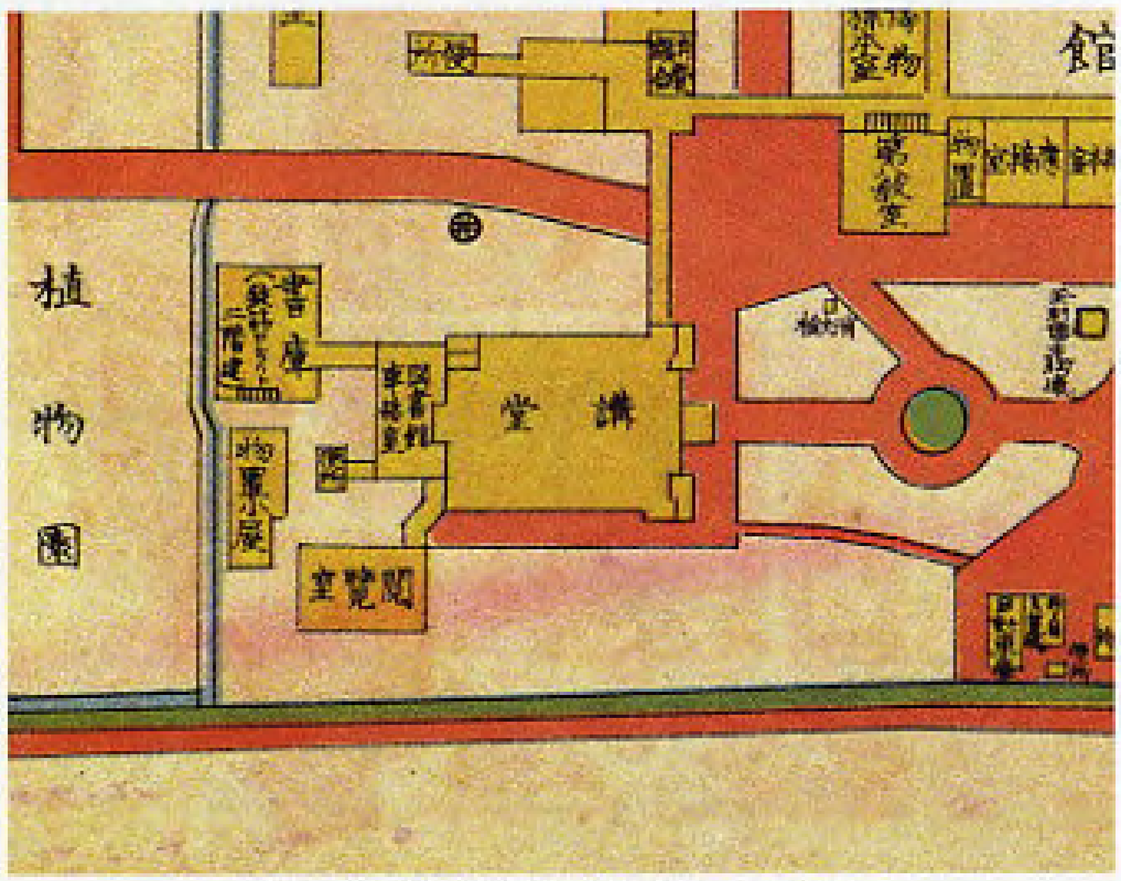
このたび常設展示室として開館した建物は、1928（昭和3）年に鹿児島高等農林学校の図書館書庫として建てられたものです。

鹿児島高等農林学校は1908（明治41）年に開校し、1911（明治44）年に二階建て60坪（198m² ）の石造の書庫が建てられましたが、内部の棚がシロアリの害に遭い、鉄筋コンクリートに建て替えられたのが、現在の常設展示室です。

図書館は、講堂の南側に接して事務室があり、書庫と閲覧室が渡り廊下でつながった三つの施設からなっていました。

1945（昭和20）年6月17日の鹿児島空襲において高等農林学校も焼夷弾攻撃の標的となり、本館をはじめ学校施設の約半分が炎のなかで灰燼に帰し、膨大な損失を被っています。そのとき講堂は着火したにもかかわらず、幸いにも学生の消火活動によって救われました。

空襲で多くの施設を失い、また戦後の復興や新たな大学改革のなかで高等農林学校時代の木造建物は次々と姿を消して行き、最後に唯一残った学校施設が、このたび常設展示室に改装された旧図書館書庫です。鹿大の歴史を語る建物として、重要な役割を担っています。



鹿児島高等農林学校　講堂付近　構内図

講堂

講堂

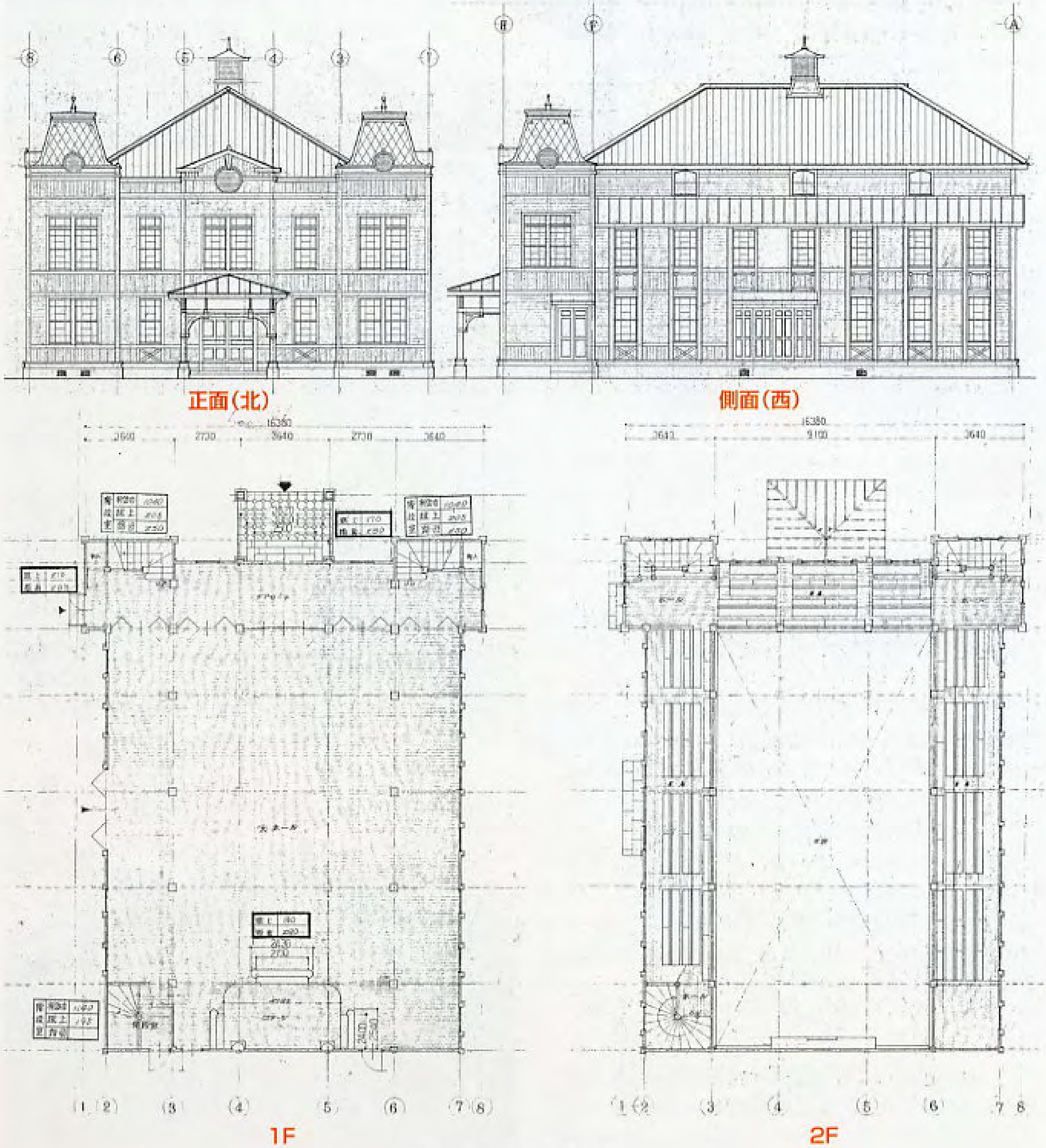
旧図書館書庫はもともと講堂と一体の建物でした。現・大学院連合農学研究科建物の場所にあったこの講堂、いまでは鹿大関係者でも知る人がずいぶん少なくなっていますが、戦後も長い間にわたって存在し、高等農林から鹿大のシン

ボルとして受け継がれていました。しかし、老朽化のため1981（昭和56）年に残念ながら取り壊されてしまいました。

講堂は1910（明治43）年、文部省の技師が設計・監理を担当して建築されたものです。学校建築が簡素なデザインから定型化したデザインへ変わっていく過渡期にあり、装飾的要素が多く加えられた明治末頃を代表する建物でした。

同時期に同じ技師たちが関わった建物として、鹿児島高等農林学校と同年開校の奈良女子高等師範学校の本館があります。1908（明治41）年に建築されたこの建物は、現在、奈良女子大学記念館として受け継がれ、学校建築の歴史遺産として国指定の重要文化財となっています。また、1902（明治35）年開校の盛岡高等農林学校の本館は1912（明治45）年の建物ですが、現在、岩手大学農業教育資料館として保存され、ここも国指定重要文化財となっています。もし、いまも鹿大に講堂が遺っていれば…と思うと惜しい気がします。

橋本達也



講堂　図面（農学部 資料提供）

常設展示室の周辺案内

鹿児島大学植物園

現在の鹿大植物園

鹿児島大学の植物園は、1909(明治42)年の鹿児島高等農林学校開校に際し、初代校長玉利喜造の命により草本、木本を含めた植物園として計画されました。そして約10年後の1919(大正8)年頃、構内に約0.8haの分類式花壇として完成したとの歴史が伝わっています。当初は草本類や木本類が植栽されていたようですが、第2次世界大戦で鹿児島市街地が壊滅状態となり植物園もほぼ丸裸になりました。しかし、終戦の1945(昭和20)年には早くも林学科の教職員、学生の手により順次整備されてきたと聞いています。整備が進むにつれ植物園は「林園」と呼称され、林学科(現、生物環境学科)学生の樹木実習の生きた教材として現在まで使用されてきています。この間、林学科造林学教室の初島住彦教授(鹿児島大学名誉教授)と迫 静男助教授(故人)は精力的に南西諸島の木本植物の収集と植え込みを行い、整備に努めてきました。その結果、今では日本でも特異な植物園となっています。

鹿児島大学の植物園は市街地の中で緑の楽園となって、渡り鳥の休憩地にもなっています。これからの植物園は教育・研究や環境教育の場としては勿論のこと、市民の憩いの場として、あるいは生涯教育に資する場としても整備される必要があります。そのため、1999～2004年の学長裁量経費による全学環境教育研究プロジェクト「鹿児島大学エコキャンパス・プロジェクト」により、樹木銘板を整備し、また樹木写真集「鹿児島大学植物園の樹木たち」を発刊しました。

植物園の樹木の種類は1979(昭和54)年の第1回目の調査では659種が(詳細は鹿児島大学農学部植物園樹木目録.鹿演報1979を参照)、1988年の調査では547種が記録され、また各樹種の位置図も作成されました。その後1992年に整備と樹木の再調査が行われましたが、この時は枯損や台風などによる倒木があり、約400種程度に減少していました。さらに、2003(平成15)年の調査では樹種数は300種を下回り、植物園としての機能を失いつつあることが判明しました(詳細は鹿児島大学農学部植物園樹木目録(2003年度改訂)・鹿演報2003を参照)。種数の減少は現在でも進行中で、その原因の一つとして、クスノキやバクチノキなどがひときわ高木となって他の樹種を被圧し、そのために枯死する樹木が増加したことによると考えています。イギリスのキュー王立植物園やインドネシアのボゴール植物園は別格として、一般の植物園には限られた面積の中にできるだけ多数の植物を生育・保存するという命題が課せられています。さいわい、2003年の詳細な調査により必要不可欠な樹種を特定することができましたので、今後は樹木の樹勢を観察しながら適宜手入れを行い、これまで枯損などにより消滅した樹木の補植を精力的に行うなどして、少なくとも1979年のレベルまで戻したいものと願望しています。

※植物園の樹木目録(2003年度版)は総合博物館の常設展示室もしくは演習林事務室で配布しています。また、常設展示室には代表的な樹木が載ったガーデンマップを置いています。

農学部教授　馬田英隆

昭和10年頃の植物園(上の写真と同じ場所)

玉利喜造像

玉利喜造像

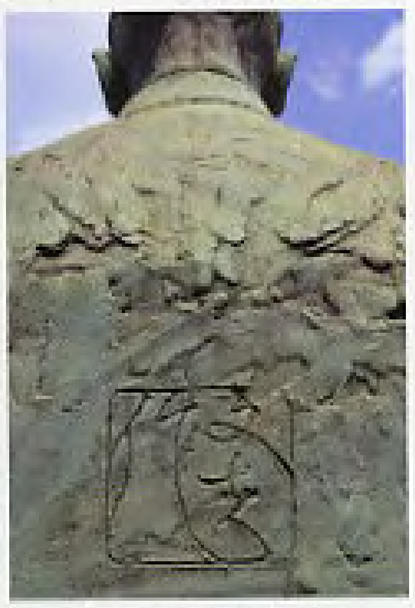
常設展示室より北の地区、奄美の高倉の道路をはさんで西側に、ブロンズの胸像があります。像に写されたのは鹿児島高等農林学校初代校長 玉利喜造です。この像はさまざまな意味で鹿大の歴史を知る重要な資料です。

まず、玉利喜造氏ですが、明治42年、南方資源の開発を目的として設立された鹿児島高等農林学校の初代校長として、盛岡高等農林学校(現・岩手大学の前身)より赴任されました。日本の農学士・農学博士ともに第1号であり、また貴族院議員にもなっています。

胸像は、はじめ台座とともに大正14年、安藤照氏によって作られました(鹿児島市立美術館横の西郷隆盛像や東京渋谷の初代忠犬ハチ公像の作者。ハチ公は戦時供出によって現在2代目)。しかし、像は第2次大戦中に資源として供出され、一時台座だけになっていました。また、高等農林は空襲による戦災を被っていますが、この際に機銃弾が台座に命中し、弾痕が残っています。

今では、1945(昭和20)年4月から6月にかけて、高等農林学校がアメリカ軍戦闘機による機銃掃射の標的となったこと、そして農場にいた学生が撃たれて亡くなったことや職員1名や駐屯兵2名が爆撃で亡くなったこと、6月17日の焼夷弾攻撃で学校施設の大部分が焼失したことも、知らない人がほとんどだと思います。この銅像は近現代史を身近なものとして知る上でも非常に重要な資料です。

戦後になって昭和24年胸像は再び制作され、もとの台座の上に載せられました。その制作を行ったのは、日本近代美術を代表する彫刻家・朝倉文夫氏です。代表作「墓守」など写実的な作風で、人物や動物など数多くの作品を残していますが、とくに肖像をたくさん残しています。玉利喜造像もその一つです。実物を見ると、よくある銅像とはちょっと違う雰囲気が感じられるのではないでしょうか。機会があれば後ろに回り「文夫作」の力強い文字も見てみて下さい。また、当時運送事情が悪く、この銅像は同窓会の一人の方が風呂敷に包み背負って汽車に乗り鹿児島まで運んだというスゴイ話があります。



文夫作

東京都台東区には、朝倉文夫氏自身の設計による和風と洋風の両建築を融合させたアトリエ兼住居があります。現在は区立朝倉彫塑館として利用されており、代表的な作品がたくさん展示されています。玉利喜造像もここで生まれたものでしょう。

弾痕

奄美の高倉

ニュースレターNo.6で紹介しました奄美の高倉は常設展示室の北側の地区に建っています。1883(明治16)年に奄美大島の大島郡大和村で創建された現存最古の高倉です。2002年に工学部建築学科の有志のみなさんによって再建されたものです。

また、玉利喜蔵像とは向かい合わせの位置にあります。ぜひあわせてお立ち寄りください。

農学部門付近のソテツとヤシ

特別天然記念物の子孫－ソテツ

農学部門と農学部1号館の間にあるソテツは、1910（明治43）年3月に高等農林学校の開校を記念して植樹されたものです。植物学の河越重紀教授、林学の西力造助教授と農学科・林学科の学生代表各1名の4人が佐多演習林に自生していたものを持ち帰り移植しました。戦争時の爆撃でもずいぶん失われたようですが、まもなく100年を迎えようとしており、いまでも繁茂しています。なお、佐多演習林に自生するソテツは国指定の特別天然記念物になっています。

戦争の証人－カナリーヤシ

ソテツのすぐ北側にあるカナリーヤシの幹には、いまではわかりにくくなっていますが、地面から上1.4mほどのところに1945（昭和20）年の空襲による弾痕が残っています。玉利喜蔵像台座とともに被弾した鹿大の歴史の生きた語り部です。

橋本達也

農学部門の付近
左端・玉利像，
右端・ソテツ，
中央・ヤシ，
中央右奥・高倉

ソテツ

ヤシ

2003年度後半の活動

■2003年12月1日　15:30～17:30
第4回研究交流会「弥生時代の新しい見方」
講　師：春成秀爾（国立歴史民俗博物館 教授）
場　所：理学部101号講義室

■2004年2月16日　13:30～16:00
第4回生命科学学術講演会（共催）「麹菌を利用したゼロエミッションシステム」
講　師：山元正博（霧島高原ビール株式会社 代表取締役）
場　所：理学部220号講義室

■2004年2月28日　13:30～16:00
第2回ワークショップ「アジア東部に独自の穀類のモチ性とモチ文化」
講　師：坂本寧男（京都大学名誉教授）
場　所：総合教育研究棟2階201号

2004年度前半の活動

■6月5日（土）　13:00～15:00
第4回　公開講座「大学博物館へのいざない」
担　当：総合研究博物館専任教員
場　所：総合研究博物館常設展示室

■7月2日(金)　14:30～16:00
第5回　生命化学学術講演会（共催）「地球のこれから～南極観測から地球未来を探る」
講　師：宮田敬博（池田診療所 医師、第39次・第44次南極観測隊員）
場　所：理学部101号講義室

■7月10日(土)　13:30～15:30
第5回　研究交流会「鹿児島から太古の地球を考える」
講　演：「薩摩硫黄島海中温泉から太古が見える!!」田崎和江（金沢大学大学院自然科学研究科）
「太古の地球を掘削する」根建心具（鹿児島大学理学部）
場　所：共通教育棟101号室

■7月24日(土)　8:30～16:30
自然体験ツアー「指宿植物試験場たんけん　暑い国の植物たち」
案 内 係：遠城道雄（鹿児島大学農学部 指宿植物試験場）　落合雪野（総合研究博物館）
実施場所：農学部附属農場　指宿植物試験場
対　　象：小学校高学年の児童と中学生、およびその保護者 30名

●今後の予定

■10月30日(土) 13:30～16:30
市民講座「ジャガイモと文明」
講　師：山本紀夫(国立民族学博物館)
場　所：郡元キャンパス 総合教育研究棟2階201室（無料）

■10月21日(木)～11月24日(水)　9:30～17:30
特別展「機器は語る－教育と研究の百年史－」
場　所：郡元キャンパス 総合教育研究棟2F プレゼンテーションホール（無料）

■11月14日(日)
市民講座「タイトル未定／実験」
講　師：戸田一郎（実験コーディネーター）
場　所：郡元キャンパス 総合教育研究棟2階201号室（無料）
●ミニコンサート
演奏者：池田博幸(フルート)・有村航平(チェロ)ほか
場　所：郡元キャンパス 総合教育研究棟1階エントランスホール（無料）

■12月18日　13:30～16:00
研究交流会「薩南海域におけるマイワシの長期資源変動」
講　師：杉本隆成（東京大学海洋研究所）・原口　泉（鹿児島大学法文学部）・
櫻井仁人（鹿児島大学工学部）・市川　洋（鹿児島大学水産学部）・大木公彦（総合研究博物館）
場　所：郡元キャンパス 総合教育研究棟201号室（無料）

お知らせ

◎ホームページアドレスを変更しました。　【新アドレス】http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/
◎FAX番号を変更しました。　【新番号】099-285-7267
◎常設展示室に直通電話を設置しました。　【新番号】099-285-7259

■発行／2004年7月30日　■編集・発行／鹿児島大学総合研究博物館　〒890-0065　鹿児島市郡元1-21-30
TEL：099-285-8141　FAX：099-285-7267
http://www.museum.kagoshima-u.ac.jp/